

# 土佐山田地区での田舎暮らし

1140160 松田夏鈴  
高知工科大学 システム工学群  
建築・都市デザイン専攻

## 1、経緯

土佐山田は豊かな自然が身近に存在し、そこで暮らす人びとも自然とともに生きている。山間部から平野部にかけて存在するこの地域は、少し移動するだけで異なる魅力を持ち、市の中心部へ行く際も不便さを感じさせない距離である。その点において土佐山田は程よい田舎といっていだろう。

田舎での生活は、暮らしの中に自然があるのか、自然の中に暮らしているのかははっきりしないところが魅力である。人との距離の取り方も、近所の人にしては近すぎるが、家族ではない不思議な距離感である。このような、人を取り巻く曖昧な環境を土佐山田の魅力と捉え、都市部からの移住者へのセールスポイントとする。

## 2、全体計画

### 2-1 対象敷地

高知県香美市土佐山田町本村



敷地等高線兼配置図 1:2000

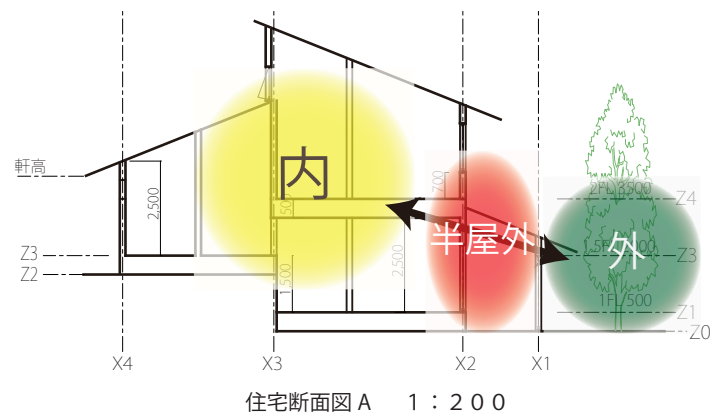
### 2-2 敷地の現況

今回住宅を提案する敷地は、現在はのどかな田園地帯である。この場所は田畑だけでなく、近くには後入川という物部川の支流が流れている。まさに自然を感じられる魅力的な空間である。しかし、この地域では高齢化に伴って過疎化が進みあまり人気のない静かな場所となっている。建物を計画する場所は、北側にある車道より最大で10m下がった位置にあるため、人目が気にならない場所である。ひっそりと静かに暮らすには最適な空間となる。



### 2-3 コンセプト

この魅力的な土地にのどかで静かな周辺環境といった地域性を活かし、都会暮らしに飽きた人がセカンドライフを楽しめる田舎の暮らしを提供する。住宅の数に対して広い敷地をとることで、各家族が畑や田んぼを自由に使えるようにする。同じような境遇の人が身近に暮らすことで、互いに協力しやすい関係を築く。



半屋外空間を設け、外と建物の内側を曖昧につなぐことで、季節の変化やその日の天候といった、自然を身近に感じることができる。出入りもしやすく、室内に持ち込みたくないものも保管できる。田舎暮らしにはよく見られる様式であるため、今回の建物にも取り入れることで、農作業を生活に取り入れやすくなる。

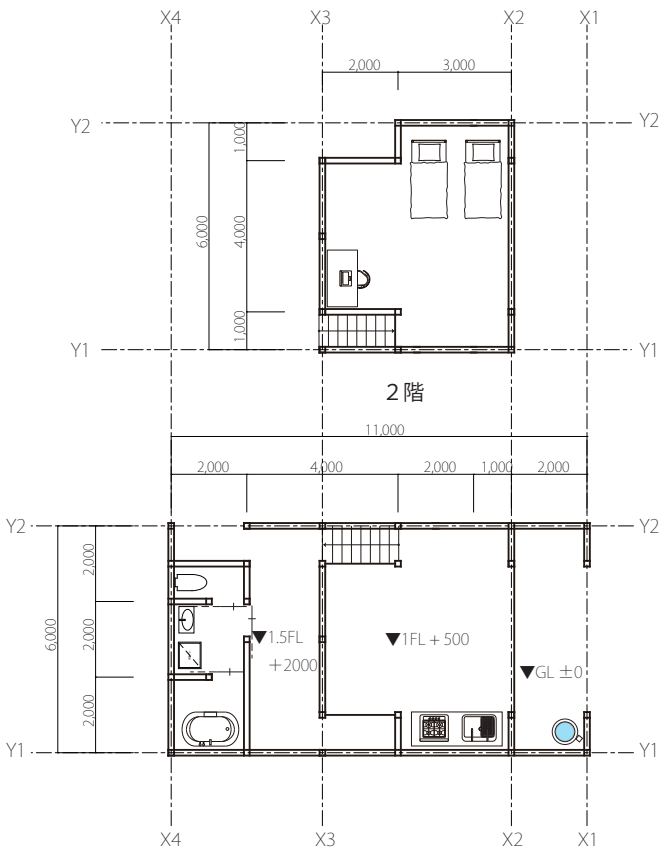


敷地模型 写真

### 3、建物概要

周辺の学習環境から考えて、田舎での暮らしを希望する子育ての終わった世代を対象とする。子どもの故郷や夫婦の終の住処となるような、落ち着いた雰囲気演出する。

TypeAの南面には土間を設けることで内と外を曖昧につなぎ、人の出入りをしやすくする。台所と近づけたのは食料庫として使いやすくするためである。建物の中で一番快適となる場所を居間や食事室にすることで、家族が集まりやすくする。敷地に合わせたスキップフロアは、建物の中間地点として生活に必要な要素を集めた。来客用に正式な玄関も設けた。2階は家族のプライベートな空間とした。他の2件も同じように敷地に合わせたスキップフロアと多用途な土間を設けた。



住宅平面図 TypeA 1階 1 : 2 0 0

### 4、土間空間の有用性

土間空間は土足で上げられる室内空間として、汚れや騒音を気にせず作業する場として昔から重宝されてきた。まず、農作物の備蓄や加工をする場として利用する。土間の一角には近くを流れる川の水をひいた蛇口を設け、井戸のように使うことができる。この水は収穫した作物を洗って冷やしたり、土間に撒いて掃除をしたり、夏場には打ち水としても使える。

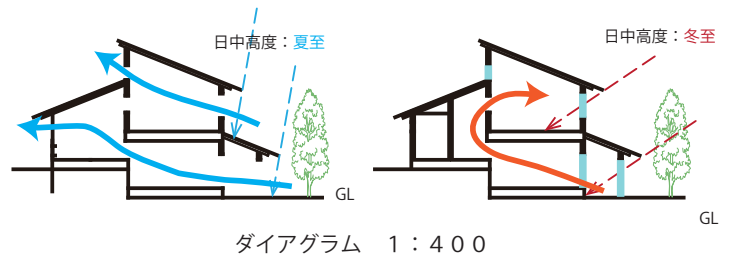
また、休憩所やコミュニケーションの場としてソフト面でも有益である。農作業時の休憩スペースや、近所の人との井戸端会議の場として気軽に使える空間である。土足で入れる内でも外でもない空間というのは、自分の領域であり、他人でも踏み込んでいいような気がする不思議な空間である。



土間イメージパース

### 5、パッシブな暮らし

現代は科学と技術の進歩により、機械に頼った快適さの中で暮らしている。昔の家は自然換気による温度調節が主流で、軒先や窓に工夫をこらして生活をより快適にしていた。この建物では、機械に極力頼らない自然エネルギーを利用した受動的な暮らしをする。どの家にも設けている土間は夏は打ち水で涼しく、冬は日光で暖かくなる。



ダイアグラム 1 : 4 0 0

農作物を作る際も露地栽培とすることで、季節ごとの旬を感じながら生活を送ることができる。四季のある日本ならではの楽しみかたである。

